

# 思いを届ける鳩時計 “OQTA” 利用者にみられる内的モチベーションの変化

高橋浄久

Kiyohisa takahashi

OQTA 株式会社

## 1. 思いを届ける鳩時計の開発とそのコンセプト

OQTA は鳩時計をインターネットに繋いで遠隔で鳩を鳴らすことが出来るシンプルなコミュニケーション装置である。一般的な使用方法としては家族などの親しい関係性の相手に OQTA を渡して「あなたのことを思い出したらこの鳩が鳴くからね」と言って鳴らすと、鳩の音を聞いた相手が喜ぶ、というものである。”思い出されたこと”のみを伝える非言語コミュニケーション OQTA は年齢や文化を問わずエモーショナルな感情をやりとりする事ができ、無意識や思いを顕在化し日常生活の中で想像する楽しさを提供する IoT プロダクトである。

## 2. ボタンを押す側のモチベーション維持

OQTA は鳩の音を聴く人のためのプロダクトであることは間違いないが、鳩を鳴かせる側、ボタンを押し続けるモチベーションを維持するための仕組みを設計する必要があった。

OQTA は鳩を鳴動させるための Web ボタンが単機能で存在するのみで、OQTA は鳩を鳴らすことによる外的報酬は用意していない。



音を聴く相手が喜んでいて/聴いているなどの直接的なフィードバックがないことが長期的な利用の

継続にどう影響するのか意見が別れるところであるが、試作機でのテストモニター中、聴いている相手が鳩時計の利用を終了したあとも、ボタンを押し続けていた事例があった。押す側と聴く側のコミュニケーションが断絶したにも関わらず、押す行動が継続しているモチベーションは何か。この感情に注目した行動維持の仕組み・構造を作れないか検討することにした。

### 3.1 セミ匿名性の効果

OQTA とコミュニケーション構造に近いものに Facebook Poke がある。それぞれ共通して非言語コミュニケーションかつコミュニケーションコストが極端に小さい。違いは Poke は発信者と受信者がお互いが誰であるか知っているのに比べ、OQTA は鳩を鳴らした人物が8人のうちの誰かはわからないというセミ匿名性を持たせている点である。Poke は行為の主語が誰かわかる/わかられることで、その行為の意味が限定されるのではないかという仮説を立て、行為の主語が誰かわからないほうが意味が限定されにくく、押す側も聴く側も飽きずに OQTA を継続利用できるのではないかと考えた。

### 3.2 一方通行の効果

OQTA は返信機能を持たせていない。既読のような機能もない。発信者が送った音を相手が聴いたかも知れないし、聴いていないかもしれない。受信者は誰かからの鳩時計の音を一方的に聴くだけで、OQTA のコミュニケーションは一旦完結する。想像を楽しむ OQTA に於いて、一方通行（受信者にとっては匿名）のコミュニケーションはそれぞれの想像の世界（妄想）に浸れるために有効と考えた。また相手の生活時間を不用意に束縛しないというコミュニケーションの距離感にも配慮して返信機能を

持たせないという選択をした。

### 3.3 音の特性

コミュニケーションのデバイスとして鳩時計を選択した理由の1つに「音」の利点があった。OQTA はメディアの余白を埋めて想像（妄想）を楽しむものであるから、情報は少なければ少ない方が良い。その点でOQTA と鳩時計（音）の相性はよい。受信者は鳩の音を聴いた時「鳩がこう言っている」と無意識に意味付けをし、受信者が深層心理で望んでいるエゴイスティックな心理を音に感じてカタルシスを得る構造になっている。発信者にとってはボタンを押すだけなのでコミュニケーション発信コストはとも低い。

また、新しい体験を提供するにあたり、世界各国老若男女誰でも知っている鳩時計であれば心理的導入コストも低い。

## 4. 他者承認から自己承認への変化

2018年2月末で鳩時計は38台稼働しており、テスト期間は約2年、鳩のボタンは総計10万回押されているが、ボタンを押すモニターの多くは「相手が聴いていること」が重要であると答えた。この場合、聴く相手を喜ばせること（他者承認）がボタンを押し続けるモチベーションになっていると思われる。しかし検証を続けるに従って（相手が聴いているにこしたことはないが）聴いていなくても関係なく押す利用者が現れはじめ、またそのモニターと長期利用者（数ヶ月～1年半）との相関もみられた。

長期利用している彼らにインタビューすると共通して『自己満足』と答えた。OQTA モニターの利用開始時（無関心期→関心期）のモチベーションは他者承認であるが、実行期から継続期に移行した利用者のモチベーションに自己承認が関与しはじめたのではないかと思われる。ボタンを押す仕掛けは同じだが、利用者にとって徐々にその意味が変わっていく内的モチベーションの変化があるのではないか。

## 5. まとめ

OQTA は新しいカタチのコミュニケーションのを提案するにあたり、情報に意味を持たせないこと・意

味がなくても成立する仕掛け/仕組みを意識した。

その構造は様々なシーンに利用できるのだが、1年半の検証の結果、行為や音の意味付けを道徳的規範（思いやり・愛情）として利用する人が最も長期に継続しているということがわかってきた。この行為は生物学的にどのような位置づけになるのか、愛情ホルモンと呼ばれるオキシトシンの研究者にも意見を伺っており、今後の研究対象としたい。

まだ事例は数例だが、他者承認から自己承認へ目的がすり替わり、行動が継続する可能性に注目して、引き続き調査・検討したい。この行動に社会的文脈をかけ合わせるとさらにモチベーション強化されるのではないかという仮説をたて、押したログの可視化なども試みている。

## 参考文献

- [1] 松村真宏:仕掛学 東洋経済新報社 (2016)
- [2] 有田秀穂:「親切」は驚くほど体にいい!飛鳥新社(2011)
- [3] 高橋徳:人のために祈ると超健康になる!マキノ出版 (2018)